タイトル：2021 年度研究セミナー（第 22 回）
日時：2021 年 12 月 17 日（金）～18 日（土）
オンライン開催

「レバノンの共産主義者とレバノン内戦における宗派主義を巡る議論」
早川英明（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程）

私は 5 年前に教育セミナーで一度発表し、今回中東☆イスラームセミナーで発表するのは２度目となった。前回教育セミナーに参加した際は、自分の発表はもちろんのこと、他の方の発表やそれに対する先生方の質疑応答、他の参加者との交流など、参加するだけでも極めて得るものの大きい機会であると感じ、ぜひ将来また研究セミナーで発表したいと思ったのだが、今回 5 年越しに目標が叶って感無量である。

前回教育セミナー参加時は新型コロナウイルス感染症蔓延のはるか前のことであり、当然対面方式（などという言葉すら当時使わなかったが）での開催であった。4 日間毎日 AA 研に通い、最終日には打ち上げもあって、合宿に参加しているような楽しさがあったのを覚えている。残念ながら今回はオンライン開催となり、前回のような合宿気分は味わうことができなかったが、それはもちろん仕方のないことで、むしろ自分の研究発表への集中力が増したと前向きに捉えている。

5 年前のセミナーでは修士論文について発表した。修士論文では、マフディー・アーミルというレバノンのマルクス主義者の思想について扱った。博士課程に進学した当初、博論では、アーミルだけでなく、それ以外のレバノンのマルクス主義・共産主義思想について扱うことにし、レバノン留学中も幅広くレバノンの共産主義運動について資料を集めていた。レバノンから帰国後、集めてきた資料を読んだり論文にまとめたりしている過程で、気が付いたら修論同様、アーミルを中心に書いてしまっていた。砂漠で道に迷った時のように、まっすぐ進んでいるつもりが一周して元の地点に戻ってきてしまっただけなのではないか、と悩んでいたのだが、今回の発表後、前回の発表を覚えていてくださった先生が、「前回に比べても議論が進歩している」という趣旨のコメントをしてくださり、自信を持つことができた。

私は来年度末までに博士号を取得することを目標としており、今回は来年度中に提出する博士論文の一部について発表を行った。これまで博士論文を書いてきた先輩方を見ていても、博論の各章を書いた後、博論全体でどのような議論を行うのか（つまり、序論・結論をどのように書くか）、提出前の執筆最終段階で悩んでいるかたが多かった印象を持っていた。なので、今回の発表では、現段階で考えている博論全体の議論の枠組みについても提示することにした。その結果、先生方からとても多くの有益な助言を頂いた。今後、博論全体の議論をどのようにまとめるか、提出まで検討していくことになるわけだが、その際の道標になるようなアドヴァイスを頂けたと感じている。また、用語の使い方や事実関係などで検討が足りていない部分に気づかせていただけるようなコメントも多く頂けた。

他の参加者の方の発表や、初日の情報交換会などでも多くのことを学ぶことができた。事務局の皆様、先生方、参加者の皆様に深く感謝申し上げる。